第67弾

分厚いの、だけじゃない

T「今回のテーマは「図鑑」です。図鑑マシマシイラスト・写真多め～♪」
F「なにそれ Tさん」
T「某ラーメンの注文の仕方が呪文のようだと聞きまして、ちょっと真似してみました。テーマが図鑑→図鑑いっぱい→図鑑マシマシ、みたいな」
F「棚が図鑑でいっぱいになるのは間違いないけれども。しかも、13ページの「いつもよりイラスト・写真が多め！」のところに「替え玉、じゃなかった貸出無料でできます」って書こうとしてなかった？」
T「それはやめました」
F「Tさん、「えぇっタダで借りられるの！？って、それいつもやないかーい！」っていうツッコミまで考えてたのに～」
T「恥ずかしいので知らなかったことにしてください」

F「・・・スベってない、よ・・・？たぶん」
T「今猛烈にお笑いのセンスがほしいです・・・」
F「・・・さ、図鑑の話をしましょう」
T「はい！」
F「せっかくだから大学図鑑とか職業図鑑とか、いろんな図鑑を展示したい！と思っていたらけっこう集まりました」
T「勉強になるものからちょっとマニアックでおもしろいものまで、幅広いです！重くて分厚いの、だけじゃなくて、普通の本って感じの図鑑も多いんですね」
F「イラストや写真がメインだったり文章が短めだったりするから、本を読みはじめるキッカケとしてもいいなって思います。ページをめくるだけでも楽しいですし、表紙がキレイな本がたくさんあるから棚に並べるのも楽しみです」
T「図鑑って、どうやったら載れるんでしょうか」

F「なにかの新種を発見するのです！うーん、星とか？」
T「いいですね。いつかワイエーという名の星が・・・」
F「いや、そこはホンダラケで」
T「いつかホンダラケという名の星が空で輝くことに！」
F「その日一番光ってて明るい星がホンダラケってことにしましょう。毎回指す星が変わるかもしれないけど」
T「・・・ホンダラケ（仮）を増やしていく作戦ですね。うまくいくでしょうか」
F「・・・とてつもなく難しい気はしてますよ」

←QR コードでもアクセスできます

インスタグラム公開中　ここにアクセスしてね★
https://www.instagram.com/hondarake55

Volume.74
YA通信

ホンダラケ

2026.6.1

図鑑マシマシ

いつもよりイラスト・写真が多め！
今回は図鑑特集です♪

『架空世界図鑑』

玄光社
2024年刊

726.5/24

様々な方面で活躍する10名のクリエイターによってつくられた架空の世界を紹介する図鑑です。街並みや自然、生き物など、細部までこだわり、描かれた空想の数々に沼ること間違いなしの1冊。添えられた解説を読めば、よりいっそう世界観に浸ることもできますよ。あなたはどの世界で、何をして過ごしてみたいでしょうか。彼らがつくりだす世界をもっともっと見たくなる魅力にあふれた作品です。

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のＹＡ（ヤングアダルト）コーナーでご覧いただけます。
２か月に１度、年６回発行予定です。
ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。ＹＡコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記
～三田学園図書委員会より愛をこめて～

テーマは「植物」
緑まぶしい、青春まぶしいセレクション♪

『クスノキの番人』

東野圭吾/著　実業之日本社
2020 年刊

F/ヒガ

主人公である玲人はとある理由から罪を犯し人生に投げやりになっていた。会ったこともない伯母から代々続く神社にあるクスノキの番人を託される。そのクスノキは祈れば願いが叶うと言われている。主人公は参拝客とのやりとりを重ねていくうち徐々にその仕事に対してやりがいを持つようになる。読むと心が温まる一冊です。

P.N. 橋本侑樹（高校 3 年生）

「こんな本、棚から見つけました」の コーナー

このコーナーでは、スタッフが棚を見て“再発見”をした本を紹介します

『錯視芸術　遠近法と視覚の科学』

フィービ・マクノートン/著　駒田曜/訳　創元社　2010 年刊

錯視とは、目にしているものの大きさや形、色などが実際とは異なって見える現象、つまり目の錯覚のことです。みなさんは平面に描かれているものに奥行きがあるように見えたり、動いているように見えたりしたことはありませんか。この本では、そんなふうに見せる手法の数々を多くの図を用いて紹介しています。
分かっていても錯覚してしまう不思議や、わたしたちの目や脳がどんな捉え方をしているのか、一緒に知ってみましょう。

145.5/10

新着図書 Pick Up

『世界の終わりが来るまえに』

アンナ・ウォルツ/著　野坂悦子/訳
フレーベル館　2026年刊

タイトルを見れば SF っぽいですが、内容はバリバリに現代ものです。髪をばっさり切って、スマホを捨てて、田舎に住む叔母一家のもとにやってきたエレナ。そこで出会ったのが世界を苛むだろう危機に一人で備えているアトラス。どうしようもなく孤独を抱えた二人の一筋縄ではいかない交流が始まります。
どちらをむいても行き止まりに見えてしまう苦しさや不安。それに寄り添ってくれるようなあたたかな読後感です。

949.3/ウオ

難しいと思われているけれど、実は面白い名作があるから読んでみてほしいんです。

『二十億光年の孤独』

谷川俊太郎/著
日本図書センター　2000 年刊

国語の教科書に作品が載っていたり、作品が合唱曲になっていたりして、知らない人はいないだろう国民的詩人の第一詩集。なかには、著者が 10 代のときに書かれた詩も収録されています。
どの作品もわたしたちがふだん使う言葉で書かれていて、「詩ってムズカシイ」という思い込みを吹き払ってくれます。気負わない、飾らない言葉遣いだからこそ、心の深くにささります。「比喩」や「リフレイン」など技法のことはいったん忘れて、改めて言葉そのものを味わってみませんか？

911.5/タニ